



LGBTsに対して大学でできること

特集 1

P2~P13

2017年度第1回教育支援センター「FD・SD研修会」開催

LGBTsとの共生:大学でできること

- LGBTの基本
- LGBについて
- LGBの日常生活体験
- 同性愛は精神疾患/障害か
- 同性婚/婚姻の平等
- LGBである首相
- 困るポイント(LGB)
- 性同一性障害/トランスジェンダー
- Tに関する日本での出来事
- 性同一性障害は精神疾患/障害か
- 困るポイント(T)
- LGBTAIQ?
- LGBTsを知らないリスク
- 人材としてのLGBTとLGBTマーケット
- 大学とLGBTs
- 質疑応答より
- アンケートより

LGBTs:同性愛、バイセクシュアル、性同一性障害

日本におけるLGBT人口はおおよそ13人に1人という調査結果が出ており、LGBTやダイバーシティ(多様性)は、現代社会の課題として注目を集めています。そして大学は、教職員やLGBTの学生や教職員をはじめとする、全ての人々が安心して教育・研究、学修を行えるよう環境を整備することが求められています。

21世紀に入ってから十数の国で同性間での婚姻が法制化されており、LGBTである人々との共生は国連においても重要な課題として認識されています。日本では、法律の面で十分とは言えませんが、平成27年に文部科学省が性同一性障害の児童生徒への対応に関する通知(「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」)を出したり、平成24年に厚生労働省から出された自殺総合対策大綱においても性的マイノリティの自殺リスクについて触れられています。産業界においては、購買力の高いLGBT層にアプローチするLGBTマーケティングや、能力の高いLGBT層を積極的に採用するLGBTリクルーティングが、企業の生存戦略として活発化してきています。

大学での動きはまだ始まったばかりですが、学生のみならず教職員にもLGBTである人々は含まれており、人権的な観点だけでなく大学の価値を高める意味でも重要なトピックとなりえます。

今号は、「2017年度第1回FD・SD研修会」の内容を掲載いたします。



LGBTsとの共生：大学でできること

石丸 径一郎 准教授（お茶の水女子大学 基幹研究院 人間科学系）

2017年度第1回FD・SD研修会「LGBTsとの共生：大学でできること」(2017年6月27日開催)より



石丸 径一郎 准教授

教育支援センターは、2017年6月27日（火）にお茶の水女子大学基幹研究院人間科学系の石丸 径一郎 准教授をお招きし、2017年度第1回FD・SD研修会「LGBTsとの共生：大学でできること」を開催しました。当日はテレビ会議システムで大学の7キャンパス及び短期大学部、福岡短期大学に配信し、208名の教職員、44名の学生が参加しました。

皆さんこんにちは。本日はお招きいただきありがとうございます。石丸と申します。

今日は「LGBTsとの共生：大学でできること」というタイトルでお話したいと思います。詳しいかたと初めて訊くかたといろいろなかたがいらっしゃると思うので、今日は比較的初心者向けのお話ということでご了承いただければと思います。

LGBTsとは性的なマイノリティのかたのことなのですが、社会というのはマジョリティ向けにできておりますので、そのかたが自分らしく生きようとする、サイズが合わない靴を履いたような、きつかったりゆるかったりと、ところどころで引っかかる部分が出てきます。これがLGBTsのイメージです。

私の自己紹介ですけれども、私はLGBとか性同一性障害に関する研究や教育を、大学院に入った修士課程の頃からしておりました。研究の他に精神科のクリニックで、性同一性障害を中心とした臨床心理相談を15、6年くらい行っております。現在勤務するお茶の水女子大学に着任する前は、5年間東京大学で講師をしていました。そこではLGBTs教職員会というサークルを作ろうということになりまして、そのメンバーになりました。また、LGBTsの学生サークルの顧問もしておりました。さらに趣味の活動でもあるのですが、東京国際レズビアン&ゲイ映画祭という映画祭がありまして、私が入った頃はLGBT関係で日本で一番大きなイベントだったのですが、大学の4年生くらいから18年ほどそのスタッフをしておりました。今はNGO化してレインボー・リール東京という名前に2年前から変わっていま

す。来月開催しますので、一番最後に詳しくお話ししたいと思います。

■LGBTの基本

まず、レインボーフラッグの説明ですが、これは自らに誇りを持つセクシュアルマイノリティのシンボルとされています。日本だと虹は7色と数えますし、国によって数えかたが違うのですが、LGBTsのシンボルとして使うときは6色の虹を使うと決まっております。LGBT関係のイベントに行くとこのレインボーがいろいろなところでご覧いただけると思います。

LGBTという言葉の基本的な説明をいたします。LGBTとは単語の頭文字を取った言葉です。Lはレズビアン（Lesbian）、女性に性的関心を持つ女性のことです。Gはゲイ（Gay）、男性に性的関心を持つ男性と日本では言われておりますが、英語でゲイといった場合、同性愛という意味なのでゲイウーマン、ゲイレディーというように女性に対して使うこともあります。それからBはバイセクシュアル（Bisexual）、両方の性に性的関心を持つ人のことです。このようにLGBは、男性と女性のどちらに恋愛感情を持つか、どちらに性的関心を持つかということで分けられます。Tはちょっとジャンルが違いますが、トランスジェンダー（Transgender）、トランスセクシュアル（Transsexual）を表します。これも正確に説明しようとするのが難しいのですが、生まれた時の身体の性別と現在自分が感じている性別が異なる人とお考えください。トランスは越境する、国境を越えるという意味なので、男性から女性になったかた、女性から男性になったかたという意味になります。

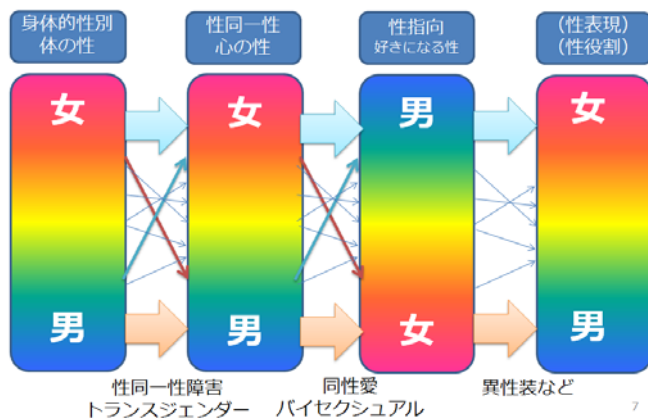
これらを理解するためには、人間の性別を4種類くらいに分けて考え、整理をすると良いと思います。まず1つ目は身体の性別、身体的な性別、2つ目が心の性別、これを性同一性とか性自認、ジェンダーアイデンティティといいます。3つ目は性指向です。性指向とは、男性女性どちらを好きになるかということで、厳密に言えば性的関心をどちらに持つかということです。4つ目は、性表現、性役割です。どのような服を着るか、男子トイレに行くか、女子トイレに行くか、どのような話しかたをするか、1人称は「僕」と言うか「私」と言うか「俺」と言うかというようなことです。多数派の人たちはこれらが一貫しており、少数派の人たちはこれらがど

ここの側面でマイノリティになっています。

このように説明するとシンプルのように思いますが、1つ目から4つ目までそれぞれを定義するというのも難しいことです。例えば、1つ目の身体の性別というのも簡単なようでいて難しいです。オリンピックなどでは、本当に男性か女性かどうかを調べるセックスチェックがドーピングのチェックと同じように行われます。何をもって男性の身体と言うか女性の身体と言うかは、突き詰めて考えると難しいです。2つ目の心の性別も難しい概念です。何をもって男だと思っているのか、女だと思っているのか。3つ目の性指向、これも先ほども言いましたけれども、恋愛感情がどちらの性別に向いているのか、現在どちらの性別のパートナーがいるのか、性的な関心がどうなのか、このように考えると複雑です。

今の説明を図に表すと次のような形で表現されますが(図1)、左から身体の性別、次が性同一性、心の性別、次が性指向、好きになる性別、次が性表現とか性役割になります。多数派のかたたちは大きな矢印のように女性の身体で女性の心を持って男性を好きになって、女性の服装をし、女性用トイレに行くということになりますが、少数派のかたたちは間にある細い矢印のようになっており、性同一性障害とか同性愛とか異性装という

(図1) **セクシュアリティの諸要素**



カテゴリに分かれます。それからたくさん書かれている細かい矢印は、男性か女性かと2区分に分けるのではなくて、自分は中性ぐらいだとか、自分は性別が無いと思っているとか、7対3ぐらいのところだと思っているとか、時々男性だけど時々女性だとか、中間にもいろいろなパターンがありうるということも同時に示しております。

LGBTという言い方はここ5、6年くらいで日本で使われるようになったのだと思いますが、恐らくNHKがLGBTという言葉テレビ放送で使い出して日本でも広がったのだと思いますけれども、どうしてこういう名前と呼ばれるようになったかと言いますと、ホモセクシュ

アル、同性愛という言葉はかつて病気の名前であったという歴史があります。精神疾患のリストに入っていました。ですから、あまり好まれないというか、当事者たちは忌避するというか嫌がったので、変わりにレズビアン、ゲイ、バイセクシュアルと呼ばれるようになったのですが、長いのでLGBと言われるようになりました。少しLGBとはジャンルが違うのですが、トランスジェンダーや性同一性障害も含めてLGBTと呼ばれるようになりました。しかし、先ほどお話したようにとても複雑で多様な存在がありえますので、LGBTの4種類の他にも様々なマイノリティが存在します。

性分化疾患/インターセックスというのは、身体の性別が男性に典型的でも女性に典型的でも無いというようなかたです。まだ自分が何なのか分からない模索中のかたなどもおりまして、全部つなげてLGBTAIQと言ったり、それでも全部はカバーできないので複数形のsをつけてLGBTsというように包括的に言ったり、LGBT+で他のカテゴリも表したりというような表現がされております。まだどれが決定版か定まっていないような状況です。

人口中にどのくらいの割合でいるかと言いますと、結構たくさんいます。日本では学術的な調査というよりも、民間企業、広告代理店が調査した数字がいくつかあるのですが、電通ダイバーシティラボの調査では7.6%という数値でした。これは20～59歳まで5万人を対象にインターネット調査をした結果だそうです。10人に1人よりは少ないけれども、それにしても結構たくさんいます。講義形式の授業であれば必ず学生さんの中には何人かいると思ったほうがいいと思います。7.6%という数字は有名で、いろいろなところで引用されていますけれども、概念としてとても複雑で定義が難しく、つまり境目を決めることが難しいです。どこまでがLGBTでどこからが多数派かなのかというのははっきりと分けることがとても難しいです。よって、意味を広く取れば10%超えるかもしれませんし、厳密にして意味を狭く取れば3～4%ぐらいになるかもしれません。例えば女子高出身のかたで、女子高に通っている間はカッコいい女の先輩に憧れたという人はかなりたくさんいると思います。それを同性に惹かれたと取るならば10%超えてくると思います。

■LGBTについて

まずLGB、同性愛、バイセクシュアルの話をしていきます。Apple社というiPhoneとかMacBook等を作っている会社の現在のCEOがゲイなのですが、このかたはティム・クックというかたで、1960年生まれでスティーブ・ジョブズの後を継いでCEOになったかたです。このかたがゲイであることは周囲の人は皆知っていたというか、公然の秘密のような状態でしたが、

2014年に大々的にカミングアウトしました。Bloomberg Business Weekというビジネス誌に寄稿する形でカミングアウトしたのですが、「私はゲイであることを誇りに思っている。ゲイであることは、神が私に与えた最高の賜物の一つだと考えている。」という内容を書いていらっしゃいます。

なぜずっとカミングアウトをしていなかったという点、Appleは世界中で製品を売ってます。iPhoneとかMacBookをあらゆる国で売っているの、カトリック教会の強い国や、イスラム教の強い国で同性愛が宗教的に認められない国でも製品を売っていますから、ビジネス上の観点もあったのだと思います。例えば不買運動が起こるとか、そのようなリスクも引き受けた上でカミングアウトしました。AppleのCEOがゲイだと知って救われる人がいるなら、プライバシーを犠牲にしても構わないと思ったというようなことをおっしゃっていました。

ティム・クックは、「ゲイであることは最高の賜物」と言っていますが、これはゲイで良かったということです。何が良かったかという点、例えば「ゲイであることを誇りに思う」「豊かな人生がもたらされた」「ゲイであることで少数派に属することがどういうことかより深く理解することができる」ということです。多数派であつたら気付かなかつたことに目を見開かれたというようなことをおっしゃっています。

このケースをお話した理由というのは、学校関係者とか医療関係者でもそうなのですが、LGBTのテーマについて考えるとき利用者のことを考えるかたが多いです。学校であれば学生さんにLGBTのかたがいるんじゃないか、医療関係であれば患者さんにLGBTのかたがいるんじゃないかというように考えるのですが、LGBTを弱い立場の人たちだとか、かわいそうな立場の人たちというイメージを持つかたがいるのだと思います。そういうこともあるんですけども、LGBTであるというのは不幸なことだけではなくて、いいこともあるし、大きな会社の社長になることもあります。サービスする側だけではなくて、上司や同僚にもLGBTがいるかもしれないという心構えを持っていただくことを個人的にはお勧めしたいのでこの例をお話しています。

■LGBTの日常生活体験

私が大学院の時の研究の一部で、データを取ったのは確か2000年か2001年頃ですが、日本ではまだLGBTという言葉が無かった頃、ダイヤリー法という方法で調査をしました。それは、異性愛者中心の世界の中でどのような時にLGBTのかたが自分のセクシュアリティを意識しているかを日記に書きとめてもらうという調査でした。当時はまだスマートフォンが無かったので、小さい冊子を2週間持ってもらいました。協力してもらったの

は23名のLGBTの男女で、自分のセクシュアリティを意識した出来事が2週間の中で222個記録されました。

それらを分類すると、多いのが1つ目で“異性愛者を装う”という出来事です。「友人に彼女いるの?と訊かれてうまく答えられなかった。」これは、彼氏ならいるがうまく答えられなかったという出来事です。友人からは異性愛者だと思われているので、カミングアウトするのもリスクがあるし、とりあえず異性愛者を装って過ごすということがあります。また、「同性の俳優について「かわいいねえ」と言いそうになったがこらえた」、同性の俳優が好きだというのは何か怪しまれるんじゃないかと思ひ口ごもったということです。ここから分かるのはLGBTの人たちの性指向です。こういう人が好きだとか関心があるという強い感情を伴う体験に蓋をして過ごさなければなりません。とても窮屈だと思います。感情が湧き出るようなときに素直に表現できないというようなことがあるかと思ひます。

2つ目が“直接的に否定されるやりとり”で、少し悪い出来事ですけれども、「自分がとなりにいるにもかかわらず、友人が『本当にホモなんているのかなあ?』と言った」。これは確か高校生の男の子だったと思ひますが、心の中で「隣にいるよ」と思ひましたが口に出すわけにはいかなかったという出来事です。「知り合いが「あのタレントはゲイっぽいから嫌い」と言っていた」、こういうことを目の前で言われるということがあります。普通は面と向かって当事者がいる前で悪口を言う人はなかなかいないですが、目の前にいないと思ひて言っているんです。カミングアウトをしていないので、見えないから近くにいないだろうと思ひて言ってしまうんですけども、カミングアウトしていない当事者の心に刺さってしまうという出来事が時々あります。

3つ目は、“好みのタイプの人との遭遇”です。これは好きなタイプの人と出会い嬉しかったという出来事で、LGBTだけでなく多数派の人でも同じだと思います。

4つ目は“LGBT同士で楽しく過ごす”ような出来事です。これは隠さなくてよい状況です。LGBT同士で遊びに行ったりする場合、「ゲイの人たちと役者の好みについて話した。男しか話題にのぼらなかつたが、違和感無く話が進んでいるのが楽しかった」、学校や家、会社だと、なかなかこういう展開にはならないので、率直に自分の感情に蓋をせずに過ごせるということです。他には「ゲイの友だちとカラオケに行って、気を許して過ごすことができ、好きな歌を好きに歌えた」という体験も書かれていました。

5つ目は、これはLGBTで良かったことでもあるのですが、“人間関係が広がる”という出来事が時々見られました。「同じゲイであるということでお互いに共通点を

感じて、外国人と親しくなれた」、何も無ければ仲良くなれない人と仲良くなれる、世代を超えて仲良くなれた、という世代とか国籍を超えられるという体験ですね。

LGB同士だと何もかも楽しいかというところでもなくて、6つ目は「自分より若いゲイの人たちが集まる店に行ったら、疲れてしまった」というジェネレーションギャップはもちろんありますし、「あるレズビアン映像作家の映画を見たら自分とは女性の愛しかたが違ふと思った」というLGB同士で差異を感じる出来事もありました。

7つ目はですね“異性愛者からの受容”です。これはカミングアウトして理解してもらえたという体験で、これも時々見られました。

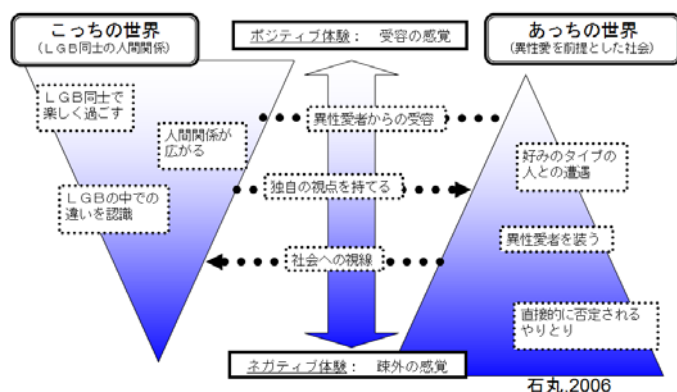
8つ目は“社会への視線”に関することです。社会が多数派の視点でできているのでちょっと違う観点から見るができます。「辞典のある項目に『異常者、変質者、同性愛者』と載っていてショックを受けた」。こういうのは出版社に訂正を依頼をしてかなり修正されていると思うのですが、まだこのような記述があるようです。「テレビで『人は子を作るのがつとめ』というようなセリフがあり腹が立った」。これはLGBでなくても腹が立つ人は多いかもしれませんが、このような出来事がありました。

9つ目は“独自の視点を持てる”ということです。

「自分は女性に関心がないので、バイト先のある女性の服装が、男を意識しているように見えるが自分は何も感じない」だとか「ゲイ同士で映画を観に行くと異性愛者

(図2)

LGBの日常生活体験



とは笑うツボが少し違うように思うが、ゲイであることの醍醐味を感じた」という事がありました。

これらをまとめて図にしたのですが(図2)、簡単に言うとLGBであることを隠している世界と、オープンにできる世界と2つの世界を行ったりきたり、生活し分けているということです。こっちの世界とあっちの世界と書きましたが、こっちの世界というのはLGBの世界

で隠さなくて良いのでのびのび過ごせる世界、あっちの世界というのは、家庭とか学校とか会社が異性愛を前提とした社会なので隠さなければならない世界です。あっちの世界では、異性愛者を装わなければならないので、楽しいこともあるけれども窮屈なことや嫌なことが結構多いというまとめです。

■同性愛は精神疾患/障害か

先ほど同性愛が精神疾患のリストに過去に入っていたと話しましたが、これがどういう経緯で病気ではなくなったかという簡単な歴史をお話します。60年代、公民権運動や女性解放運動が高まっていた時代ですが、ゲイ・リベレーションというLGBの解放運動も高まっていた時代でした。ストーンウォール事件というニューヨークでのシンボリックな事件があった後に、精神医学界でも議論が起きて1973年に同性愛が診断分類から一旦削除されました。これはDSM-IIというアメリカ精神医学会の診断分類基準でした。実はアメリカ精神医学会で、本人がLGBである精神科医が何百人もいて非公式に集まりを持っており、年次総会学術集會にその中の1人が顔を出さずに買い物袋をかぶってシンポジウムに登壇したことなどがあり、ホモセクシュアルという言葉が削除することになりました。削除したんですが、同様なことはSexual Orientation Disturbance (性指向障害) という名前に残りました。その次の改定のDSM-IIIでEgo-Dystonic Homosexual、ホモセクシュアルという言葉が復活しました。これは、レーガン政権直前ぐらいにエイズが流行こともあって復活したとも言われていますが、最終的には1987年にDSM-III-Rの改定で削除されてから現在まで削除されたままになっています。ここから分かるのは、病気と言いながら科学的な議論がされていない、政治的な議論だけで同性愛がリストから出たり入ったりしたということです。

授業をしていると良く聞かれるのが、動物として変ではないのかということです。動物に同性愛があるかということなのですが、数百種類に同性愛が見られていまして、理由は諸説あるのですが、人間に近いボノボでも同性同士の性器の接触が見られます。人間のようにもっぱら同性愛、同性愛の人はずっと同性愛というのは珍しいようですが、カモメ、羊ではあるそうです。それから動物の中で同性愛嫌悪はありません。人間界のように同性愛が気持ち悪いということは動物界では見られないそうです。進化的に言うと同性愛の個体が親戚の子育てにとっても協力をするので、結果的に遺伝子を残しているのではないかという仮説がありますが、はっきりとしたことは分かっておらずいろいろな説があるようです。

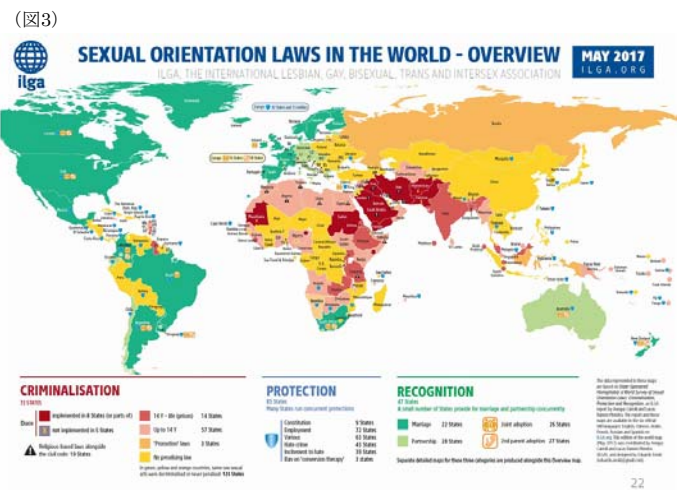
ペンギンも雄同士つがいになることは、日本の水族

館でも時々ニュースになりますが、「タンタンタンゴはパパふたり」というお父さん2人のペンギンを題材にした子供向けの絵本が日本語訳されております。

■同性婚/婚姻の平等

法制度の話なんですけど、図3はILGAというNPOが世界中の国々で法律的に同性愛がどのような扱いになっているかを地図にしたものです。緑色の国は認められている、保護されている、同性愛同士で結婚ができるという国です。濃い赤のところはデスペナルティという死刑になる国です。死刑になる国が確か8カ国だったと思いますが、イスラム教国を中心に死刑になる国もあります。日本は黄色ですが、禁止されてもいないが保護もされていないという国です。同性婚、婚姻の平等と言いますが、同性婚を認めている国が20カ国以上あります。アジアでは、台湾が婚姻を認める方向で動いています。台湾の最高裁判所が2年以内に法整備をしないと、同性婚ができる予定です。

同性婚に関する法律が20世紀にできたのはオランダだけで、後は21世紀に入ってからですが、同性パートナーシップ制度という結婚ではないけれどもパートナーシップを登録できる制度がある国は多数あります。特にキリスト教の国では、結婚は宗教的な意味合いがありますので、宗教とは別に生活のパートナーだということ登録する制度があります。登録することによって、いろいろな公的なことが認められたりします。日本では国では認められていませんが、自治体では渋谷区、世田谷



出典: International Lesbian, Gay, Bisexual, Trans and Intersex Association (<http://ilga.org/>)

区、伊賀市、宝塚市、那覇市、札幌市の6つの市区町村で今のところ認められています。自治体が出す公的な証明書がもらえますが、法的な効力はないということになっております。

■LGBである首相

LGBの首相がたくさんいます、アイスランドのシグルザルドッティルという女性や、ベルギーのディル

ポ、現在在職中なのがルクセンブルクのベッテル、アイルランドのバラッカー、セルビアのブルナビッチです。ブルナビッチは女性ですけども、このかたは先週くらいに首相になるというニュースが出ました。しかし、今週になって議会在が認めないかもしれないというニュースも出てこれからどうなるか分からないのですが(研修会後、6月29日首相に就任)、このように活躍されているかたもいらっしゃいます。カトリックの国でもこういうことが起きております。これまでもたくさんいたのかもしれませんが、カミングアウトしたかたはこの5名ということです。

■困るポイント (LGB)

LGBのかたたち、同性愛、バイセクシュアルのかたたちが困るポイントはプライベートな部分です。誰が好きとか誰と付き合っているとか誰とパートナーとか、そういった事はプライベートな部分なので、仕事にはそれほど支障が無いというか、公的には問題は無いのですが、要所要所でじわじわ阻害される感覚があるのではないかと思います。

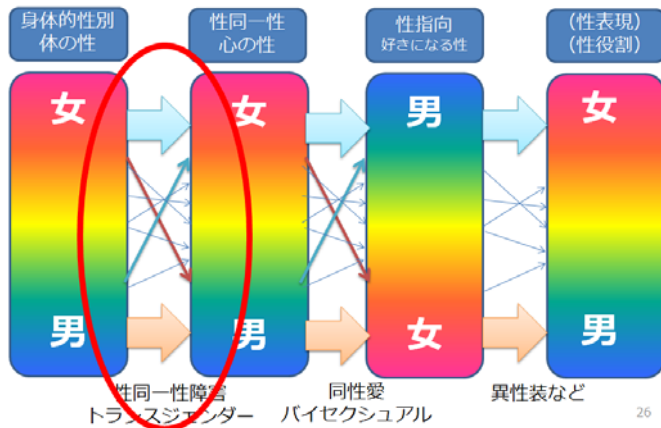
学校教育でも「思春期には異性を好きになります」等と教科書に書いてあったり、好きな人のことをオープンに話せないのが、窮屈なだけではなくて人と仲良くなりにくいのです。仕事はできるけどちょっと飲み会でいろいろ聞かれるのが嫌であまり参加しなかったりだとか、配偶者手当や慶弔休暇、結婚祝い金が得られなかったりだとか不便がありますし、パートナーが危篤だったり亡くなったりした時に法的なつながりがないと困ることがあります。特に親から反対されている場合などは、葬式から追い出されてしまったり、保険金を受け取るのが難しかったりということがあります。

■性同一性障害/トランスジェンダー

次に性同一性障害/トランスジェンダーの話に移りますが、図4の赤丸で囲んだマイノリティのかた達です。性同一性障害とトランスジェンダー、LGBTのTはトランスジェンダーですけども、少し対立するような概念です。性同一性障害は日本では有名な名前ですが、これは病気の名前です。通常は身体治療に進みます。典型的な男や女に近づくことを目指すことが多いです。診断基準は何年かに一回改定されますが、アメリカの一番新しい診断基準のDSM-5では「性別違和」に名前が変わりました。先ほどの同性愛と同様に当事者としては病気扱い嫌ですから障害というdisorderという言葉もなくしました。gender dysphoria (性別違和) という名前に現在は変わっています。WHO (世界保健機関) での診断基準のICD-11が来年出る予定ですが、そこではgender incongruenceとなること決定しています。今、日本語訳を決めているところで、いろいろな案があるのですが、「性別不合」という名前が有力です。いずれにして

(図4)

性同一性障害／トランスジェンダー



も来年には性同一性障害という名前がなくなるという流れになっております。

このように名前が変わりますが、病気として扱います。病気なので医者が診断しなければなりません。病院へ行って診断してもらうとは別に、自分のありかたを自分で名乗りたい場合はトランスジェンダーという言葉を使います。そもそも病気扱いが嫌だというアンチテーゼ的な意味もあります。自分で決めたアイデンティティということです。そもそもこの言葉が使われだしたときは、身体的性的違和というよりは、社会文化的な役割への違和への力点が置かれていました。疾患名がトランスセクシュアルだったので、トランスジェンダーという言葉を作ったということです。これは違うといえば違いますが、困っていることは比較的似ていると思われま

す。図5はDSM-5というアメリカ精神医学会の診断基準です。病気なので診断基準がきちんと定義されています。「その人が体験し、または表出するジェンダー」、これが心の性別のことです。性同一性というちょっと概念的な言葉や抽象的な言葉を使わずに、DSM-5では体験したり表出したりするジェンダーという言葉になっていま

(図5)

青年および成人の性別違和(DSM-5)

302.85(F64.1)

A その人が**体験し、または表出するジェンダー**と、指定されたジェンダーとの間の著しい不一致が少なくとも**6カ月**、以下のうちの2つ以上によって示される

- (1) その人が**体験し、または表出するジェンダー**と、**第一次および/または第二次性徴**(または若年青年においては予想される**第二次性徴**)との間の**著しい不一致**
- (2) その人が**体験し、または表出するジェンダー**との著しい不一致のために、**第一次および/または第二次性徴から解放されたい**(または若年青年においては、**予想される第二次性徴の発現をくい止めたい**)という**強い欲求**
- (3) 反対のジェンダーの**第一次および/または第二次性徴を強く望む**
- (4) 反対のジェンダー(または指定されたジェンダーとは異なる別のジェンダー)になりたいという**強い欲求**
- (5) 反対のジェンダー(または指定されたジェンダーとは異なる別のジェンダー)として**扱われたい**という**強い欲求**
- (6) 反対のジェンダー(または指定されたジェンダーとは異なる別のジェンダー)に**定型的な感情や反応をもっている**という**強い確信**

B その状態は、臨床的に意味のある**苦痛**、または**社会、職業または他の重要な領域における機能の障害**と関連している

す。それが6ヶ月状態が続いているということです。身体の性別との著しい不一致だとか、身体の性別から解放されたいという強い欲求だとか、反対のジェンダーの特徴を望むだとか、これらは違和とか違和感という生易しいものではなくて、強烈な嫌悪感という形で捉えていただければと思います。

性同一性障害の人の性別をどうい風に表現するかということですが、分類的には男性から女性になる人をMTF (Male To Female)、女性から男性になる人をFTM (Female To Male) と呼びます。これは客観的な分類としての呼びかたであって、ご本人たちがどのように言うかということトランス女性、あくまで女性である、元男性だったけれどもあくまで自分は女性であるということでトランス女性と言ったり、トランスしたことも言いたくない場合は、ただ女性であるとしか言わない人もいらっしゃるかと思います。これは同性愛かバイセクシュアルであるかどうかということとは関係が無いことも無いですが、概念としては別のことです。MTFの人が男性が好きだったり女性が好きだったりバイセクシュアルだったりしますし、FTMの人が女性が好きだったり男性が好きだったりバイセクシュアルだったりします。どちらも好きではない人もいらっしゃいます。

幼稚園の頃からスカート履きませんでしたという人もいますし、40代50代になってから性別を変えたいという人もいらっしゃいます。その場合、結婚していたり子供がいたりする人もいます。子供からしてみるとお父さんがお母さんになるという事態にもなります。

西ヨーロッパ諸国やアメリカはMTFのほうが多いのですが、東ヨーロッパや日本はなぜかFTMが多いというデータがあります。これもいろいろな説を言っています。精神科で働いている感覚では若いFTMの人がとても多く、2、3倍いらっしゃいます。性同一性障害は病気の名前なので診断と治療がありますが、まずは精神科で診断することになります。ご本人たちは身体の特徴を強烈に嫌悪しているので、身体を変えたいわけでは手術をしたいとか性ホルモンを投与したいというご希望がありますが、手術をしたり、ホルモンを投与するということは元に戻れない、不可逆な治療なので、後で後悔しないかどうかを精神科で確認するという流れになっています。不可逆なので慎重に確認するという意味で、1人だけでなく精神科医2人の診断が必要ということになっています。これをファーストオピニオン、セカンドオピニオンと呼んでおります。

精神科領域ではカウセリングということをするのですが、精神的なサポートだとか、実生活経験というのをRLE (Real Life Experience) という望みの性別で実際に生活してみる、身体を変える前に実際に生活してみることが勧められています。実際に生活してみると、

やっぱり違うなということがあります。身体の治療はいろいろありますが、ホルモン療法は値段も安いですし受けるかたが多いです。cross-sexホルモン療法と言って、男性の身体の人に女性ホルモンを投与する、女性の身体の人に男性ホルモンを投与する、そうするとそれなりの性別の特徴が出てきます。子どもに対しては二次性を延期するようなホルモンの投与があります。

手術としてはFTMの乳房切除術があります。胸があるとどうしても男に見えづらいので胸をとる手術をするとかかなりQOLが上がります。それから性器の手術です。これは性転換手術ですが、公式には性別適合手術、SRSと呼んでいます。それとMTFの造脛術です。FTMは子宮卵巣摘出・尿道延長をすると立小便ができるようになって男性トイレを使うことができるようになります。ペニス形成は無いものを材料を持ってきて作らなければならないので非常にお金がかかるのと、合併症というかうまくいかないことが多いです。ですので、ペニス形成をするかたは少ないです。その他にはレーザー脱毛したりだとか、豊胸したりだとか、細かい治療があります。

■Tに関する日本での出来事

Tに関する日本での出来事を簡単にまとめてみますと、ブルーボーイ事件で性転換手術を行った医師が有罪になりました。これは当時の優生保護法という法律がありまして、今は母体保護法と言いますが、知的障害のかた達に不妊手術をしてしまったという事件があり、そのようなことを防ぐために理由無く生殖能力を奪うようなレントゲン照射や手術をしてはいけないという法律があります。このように性転換手術をしたために生殖能力がなくなり有罪になったという事件があり、その後日本では10年くらい性転換手術をやってはいけないんだという闇の時代がありました。その後、1990年代から治療が再開されました。原科孝雄先生という形成外科医の先生が交通事故でペニスをなくしたかたにペニスを再建するという手術をやっていて、原科先生のところFTMの人が自分にもペニスを作って欲しいと言いに行ったことが始まりで、手術をするには母体保護法をクリアしなければならなかったため、倫理委員会に理由があって手術をすることを証明する手続きをとりました。厚生労働省からは、ガイドラインを作ってくださいという指導を受け、精神神経学会で1997年に診断と治療のガイドラインができました。そして1998年に日本では初の公に認められた性適合手術が行われました。

2002年には「3年B組金八先生」というドラマで上戸彩さんがFTMの役を演じたことがあって、これでだいぶ日本に性同一性障害という名称が広まりました。その後、2003年に法律ができました。性同一性障害者特例法という法律で、戸籍の性別を変更することができるよ

うになりました。条件が世界的に見ると非常に厳しい条件なのですが、2016年末までの12年ぐらいの間に6,906名の人が戸籍性別変更をされていて、単調増加で毎年前の年を上回る数の人が戸籍の性別を変更しています。2008年には「ラストフレンズ」という上野樹里さんがFTM的な役を演じたドラマがありました。2010年には、文部科学省が性同一性障害であると思われる児童・生徒へ教育相談を徹底してくださいという内容の通知を出しています。その後、文科省は3回くらい通知を出していて、かなり詳しい内容が掲載されています。2012年には、自殺総合対策大綱という政府の文書にも性的マイノリティがハイリスクグループであるということや言及されています。

■性同一性障害は精神疾患/障害か

性同一性障害が精神疾患とか病気、障害であるかどうかという話ですが、こちらのほうはDSMという精神疾患のリストに掲載されていて、名称が変わったりはしていますが、基本的にはずっと掲載されています。世界保健機関のICD（注 疾病及び関連保健問題の国際統計分類）にも掲載されて、最新版でも掲載される見込みです。当事者の運動としては、病気扱いはやめて欲しいということがありますが、同性愛と違うのは身体の治療が必要な人や身体を変えたい人が多いという点です。医学的な処置を希望する人が多く、そのためには誰が診断するのかとか、誰が治療するのかということが必要で、結局のところどこかに診断名として位置づく必要があります。他にも健康保険を使えるかどうかという問題もあります。現在、精神科のカウンセリングや精神療法は保険適用されます。3割負担等で受けられますが、身体の治療はすべて自費で、ホルモン療法なども10割負担で手術もすべて自費です。ですから、胸を取るだけでも70万とか90万かかりますし、性器の手術は100～150万かかります。診断というよりはお金があるかどうかで治療できるか決まるところがあります。性同一性障害学会では、厚生労働省に健康保険が適用されるように働きかけていますが、病気ではないとなると保険を適用できなくなるので、このあたりの兼ね合いが難しいところです。

■困るポイント（T）

トランスのかた達の困るポイントというのは、LGBと全く違い、プライベートではなくオフィシャルな面でいろいろと困ってきます。よって、日常生活で支障が出てきます。まずトイレが使えないだとか、着替えができない、更衣室が使えない、プールに入れられない、宿泊・風呂で合宿等が苦痛だとか、制服が着られないとか、下の名前が苦痛で名乗れないとか、呼ばれても返事ができないとか、髪型について困るとかいろいろなことで困ってきます。1人称が使えないとかそういうこともあります。

す。このあたりは社会の理解が進み、周囲が理解をしてくれば、だいぶ軽くなると思いますが、非常に理想的な周り全員が理解してくれるような環境であっても、自分の身体に対する苦痛とか劣等感最後まで残るかもしれないと思います。

■LGBTAIQ?

LGBT以外のマイノリティについても簡単に説明します。

Xジェンダーというのが日本では最近よく言われるようになっていて、FTX (Female To X)、MTX (Male To X)、男性・女性ではない何か、中性であるとか、無性と自称するかたたちが増えています。これは日本だけで使われている言葉です。

Aというのはアセクシュアルです。男女両方に性的魅力を感じないということです。これに関する研究は少ないのですが、大学生くらいだとカップルになる圧力が大きいのでストレスが大きいと言われていたりします。

IというのはインターセックスのIなのですが、性分化疾患と呼ばれたりしております。身体の特徴が男女のどちらでもないということです。性別の定義が難しいと言いましたけれども、性染色体というものがある、XXとかXYで性別が決まりますが、Xが1本だけとかXXYと3本ある人が、何千人に1人の割合でいらっしゃいます。性染色体以外ではホルモンの性別もあります。アンドロゲン不応症というのがありまして、男性ホルモンが出ているのだけれども、レセプターが機能しないので身体が男性化しないというかたがいます。副腎皮質過形成 (CAH) というのは、女性として生まれたのだけれども男性ホルモンがたくさん出て身体が男性化してってしまうという症状がある病気です。性器も性別があります。ロキタンスキーという先天的な膣欠損があります。膣と子宮が欠損している女性がいらっしゃいます。停留睾丸という睾丸が下に下りてこないとか尿道下裂というおしっこがペニスの下から漏れてしまうというかたもいらっしゃいます。

このかたたちはマイノリティとは自分のことを思っていないで、自分のことを男性とか女性と思っているのですが、中には自分がどちらなのか性別のアイデンティティ形成への問題を抱えるかたもいます。日本だと戸籍の問題もありますし、スポーツ競技で問題となる例もあります。陸上競技選手のキャスター・セメンヤが、本当に女性なのかどうか騒ぎになったことがありました。

Qというのは、クィアとかクェスチョニングと読みます。クィアというのは「変態」という意味ですが、当事者たちが誇りを持った自称として使い始めた言葉で、マイノリティ全体を指してクィアと呼ぶことがあります。クェスチョニングというのは性的なありかたを模索している状態ですが、10代20代、中高校生、大学生ぐら

だこの状態にあるかたが珍しくなく、ここが難しいです。男として過ごすのか女として過ごすのかはっきりしない場合に、大学の中で生活するのが難しくなってしまふ場合があります。ここは考えどころなのですが、基本的にはご本人のアイデンティティの発達なので周囲から何かを押し付けるようなことではないと思います。

Aはアセクシュアル以外 (図6) にアライという意味もあります。これは当事者ではなくてLGBTを理解・支援する非当事者のことをアライといいます。アライアンス、人を表す名式Aですね。障害学では障害は社会にあるという考えかたをしますが、多数派に起因する



問題であるという考えかたです。LGBTも同様だと思っております。多数派の理解のほうが重要であるということです。アライという目印であるレインボーマークなどを付けると、当事者が相談しやすいと思います。このイチョウのマーク (図6) は東京大学で作ったステッカーです。東京大学のイチョウのマークに6色のレインボーをあしらったステッカーを作ったりしました。

B、バイセクシュアルというのは注目されにくいのですが、男女両方に性的魅力を感じるということですね。これはレズビアンとかゲイのコミュニティでも多数派のコミュニティでも、居心地の悪さを感じる可能性があります。人口の7.2%LGBTがいるという話の中で、女子高に通っているとかっこいい女性の先輩に憧れることがあるという話をしましたが、女性ではすごく多いです。女性の性指向はとても柔軟というか流動的で、時間とともに変動していくことがあります。高校のときは女性のが好きだったけれども、大学生になると彼氏をつくるということとはとてもありふれていますので、その辺は男性と違うところかと思えます。最近流行っている言葉ですけれども、バイセクシュアルというのは性別は男と女の2つだということでバイと言っているのですが、中間にもいろいろあるんだ、多様であるという意味をこめてパンセクシュアル (Pansexual) であると自称するかたが最近若いかたで増えています。

先ほど呼びかたが定まっていないという話をしましたが、LGBTという呼びかただと仲間はずれをつくってしまいます。何文字重ねてもすべてを表すのは困難です。セクシュアルマイノリティという言葉は使いやすいのですが、意味がかなり幅広くて性的なマイノリティすべて入りますから不妊のかたももしかしたら入るかもしれません。セクシュアルマイノリティという呼びかたを小児性愛者や性犯罪者と一緒にはされたくないという意味で、

この言葉を嫌がるかたがいます。SOGI、ソーギとかソジとか言われますけれども国連などではこの言葉を使っています。性指向と性同一性を示す言葉でSexual Orientation and Gender IdentityでSOGIといいます。SOGIがマイノリティを指すわけではなくて、性指向と性同一性を示す言葉で、SOGIのマイノリティだったり多数派だったりする人がいるという意味です。

■LGBTsを知らないリスク

大学で何ができるか、大学でどんなことが問題になるかという話をしていこうと思うのですが、LGBTを知らないリスクということで、いくつか裁判の事例を紹介します。

1つ目は経済産業省の職員が裁判を起こしている例です。MTFで事情があり手術ができず戸籍は男性のままというかたで、本人は女性として生活をしていたのですが、職場で女性用トイレを使うと言われました。そうすると、男性用トイレを使うのが苦痛であるとか、トイレを使えなくて膀胱炎になってしまったとかそういうことがあり、裁判を起こしたという事例です。これは非常に難しい問題で、経済産業省が職場でMTFのかたと一緒にトイレを使ってもいいかというアンケートを取ったところ、嫌だという女性も少しいらっしゃったそうです。これは人権同士の衝突を含むといいますか、トイレとか更衣室で身体が男性の人が入ってくるのを脅威だと感じるかたはもちろんいらっしゃると思うので、ここはとても難しい課題かと思えます。お金が必要ですが、個室設備を増やしていくというのが1つの方向性だと思えます。トイレであれば「誰でもトイレ」を増設していくとかそういう方法があるかと思えます。

次は大学関係者にとってはショッキングなニュースでしたけれども、一橋大学でロースクールの学生が自殺したということがありました。この学生は、友達によって自分がゲイであることをばらされてしまった、これはアウトティングと言いますが、本人の許可無く、本人のセクシュアリティについて他の人に伝えてしまう、このアウトティングがまずいことなのかどうかということが今裁判になっております。このケースとしては、本人の精神疾患とかいろいろな複雑な事情がありますので結果がどうなるかは分からないのですが、秘密をばらすというのは基本的には良くないことだと思われると思います。性に関する秘密、セクシュアリティというのは、基本的にはセンシティブな個人情報であることが多いです。よって、取り扱いには気をつける必要があるという認識が安全だと思います。

次はコナミスポーツクラブでMTFのかたに関する例です。トランス女性のかた、このかたは手術が済んでいるかたです。手術が済んでいるので身体は女性に近い形になっていますが、戸籍をまだ男性のままにしてあると

いうことです。コナミスポーツクラブでは、戸籍の性別でロッカーを使ってくださいと言ったので、女性の身体なのに男性のロッカーを使わなければならないということになりこれも裁判になりました。最終的には和解になったそうですが、トイレとか更衣室、公衆浴場などは、最終的にトラブルになりがちというか、人権同士の衝突を含むようなところがあるなと思います。

次は小学校ですけれども、LGBTの子どもが在籍するクラスで教諭が「オカマ」という言葉を使ったということで問題になったという、これは1週間前にニュースになりました。多数派を前提とするような発言、少数派を馬鹿にする、軽蔑するような発言を授業の中でしてしまうというのはかなりまずいことであり、セクハラとして認定される可能性が高いです。根拠としては、2016年に厚労省のセクハラ指針でLGBTもセクハラの対象になりましたし、今年2月の人事院の通知の中でもLGBTに対する偏見も言動もセクハラになると明記されるようになりました。こういった根拠がありますので、授業中の発言で問題になるという可能性が十分出てきます。

それからオリンピックの話ですが、最近できた規定で、2020年の東京オリンピックのオリンピック憲章の中でLGBTに配慮することという内容が入り、オリンピックに関わる企業はLGBTの尊重ということを明文化していなければならない、企業の規則などで明文化していなければオリンピックに関われない、サプライヤーとして物品を提供したり取引をすることができないということが決められました。大学としては、例えばスポーツ系の研究などでオリンピックと関係が出てきた場合、大学としてLGBTに関する明文化した規則を持っていないと、もしかすると関わるできないという事態もありうるということになっております。

■人材としてのLGBTとLGBTマーケット

人材としてのLGBTという話で、LGBTリクルーティングの話をしていきます。昔ながらの企業だと例えば結婚しないと出世できないとか、LGBTはどうしても働きにくくて、そもそもその会社に入社しなかったり辞めてしまったりということがありますが、こぼれ落ちたLGBTの人たちを採用しようという採用活動が行われています。特に外資系では多いです。LGBT大学生向けの企業説明会がよく行われています。

LGBTマーケティングも企業社会で話題になっていて、不景気で物が売れないので、LGBTの人に買ってもらうということです。特に日本はジェンダーギャップ指数が111位で男女の賃金格差がとても大きいです。そうすると、男性同士のゲイカップルだとものお金を持っているということになります。つまり購買力が高い。そのようなかたたちに旅行や車を買ってもらおうというマーケティングが流行っております。

この2つの例は、優秀なLGBTを採用しようとかお金を持っているLGBTを優遇しようとかそういうことなので、人権福祉的な観点では反しますけれども、お客を相手にしている企業ではそれはとても重要なことなので急速に企業社会では進んでいます。日本航空ではマイレージを同性カップルで使えるようになりましたし、携帯会社の3社も同性カップルで家族割ができるようになっていきます。

■大学とLGBTs

大学とLGBTの話で前の職場の東京大学の話をしますが、LGBTサークルはずいぶん昔から、私が確認した限りでは1998年からありまして、いろいろなサークルができては消えています。大学生のサークルは、中心になっている人が卒業してしまうと続かなかつたりすることがあり、できては消えという感じで現在あるのはUT-toposというサークルです。これはメンバーは1,300名ぐらいいて、セクシュアルマイノリティの人の親睦を目的としています。これは大学に公式に認められたサークルになっております。大学生ぐらいだとカミングアウトをできないことがほとんどですので、カミングアウトの扱いは慎重でして、当事者でないとい入れないサークルです。次に、当事者以外のアライも入れるサークルを作ろうということで、TOPIAというサークルができました。当事者サークルのほうは100名を超えるメンバーがいるのですが、TOPIAのほうはもう少し数が少ないです。それからPorta Rubraという卒業生会もありまして、登録者数は200名ぐらいいます。これは東京大学の正式な同窓会の一つになっています。それからLGBTQ教職員会というのも作りまして、まだ10名ほどしかいませんが、東京大学でもLGBTQセンターを作りたいということもあり、メンバーは若い先生や職員のかたが多いです。後は、私がもう一人の先生と一緒にゼミを開いたり、先ほどのサークルの学生が、学園祭で展示をしたり、このような動きは東京大学の中でもあります。このようなことから分かるように、当事者とか有志の人たちが自主的に活動しています。多様性とかダイバーシティというのは、ビジネス的な観点ととても相性のいい考えかたで、企業社会ではとても早く進みますが、東京大学のような公務員的な組織だとなかなか動きにくいところがあるように感じています。

他の大学ではいろいろな動きがあって、早稲田大学ではGSセンター（Gender and Sexuality Center）ができています。アメリカではCampus PrideというNPO団体がありまして、アメリカ全土の大学をどのくらいLGBTフレンドリーか格付けをしているサイトがあります。いろいろなチェックリストを持っていますが、このチェック項目を元に日本版を作ったのが国際基督教大学です。「やれることリスト108」が、ジェンダー研究センター

のサイトに公開されています。ポリシーメイキング、組織としてのコミットメント、設備面、アカデミックライフ、学生生活、寮や居住、保安、カウンセリング、健康というような項目がありますので、ご関心があるかたはご覧になっていただけたらと思います。

Apple社の話でも少し話しましたが、学校関係者だと理解とか支援という観点で捕らえがちなのですが、そういう観点だと弱い人やかわいそうな人たちを助けてあげようという姿勢になってしまい当事者のプライドを損なってしまうことがあります。実際、多数派が少数派に頼る構図も出てきておりますし、「支援」というより「共生」という心構えのほうがいいのではないかと考えております。具体的には同僚や上司がLGBTかもしれない、LGBTの人たちが働きやすい職場環境にしていくということです。大学として動けるのであれば規則や憲章などに明文化していく、学内でいろいろな団体を作っていく、1人だとなかなか動かないですけれども団体にするといろいろな動きが出てくるということがあると思います。それから、大学なので学問もしていくと思います。人間の性というものはあらゆるところに関係してきますので、文化、文学、芸術、歴史、人類学

(図7) やれることリスト108 (ICU)

- ポリシーメイキング
- 組織としてのコミットメント
- 設備面
- アカデミックライフ
- 学生生活
- 寮や居住
- 保安
- カウンセリング、健康

とか、理系でも生物学とか医学でも関わってきますし、法制度や経済などにも関わってきます。豊かな文化と歴史に触れるというか、助けてあげなければならないかわいそうな人たちというよりは、学ぶべき豊かな文化を持っている人たちというような捕らえかたもできると思いますので、是非いろいろ触れてみていただければと思います。新宿二丁目は世界でも有数の規模のLGBTの集まる町ですし、文学や舞台芸術、音楽があふれています。

最後になりますが、レインボーリール東京という映画祭を紹介します。日本で2番目に大きいLGBTのイベントです。私はこのスタッフもしていますが、7月に映画祭があります。もしよろしければ、当事者の人たちも含めて楽しそうに映画を見ている感じを体験していただ

ればと思います。当事者以外でも、映画を見るということで参加していただけるイベントになっています。青山のスパイラルホールというところでレインボーフラッグを掲げてイベントをしています。最近ではグーグルが広告を出してくれたり、大きな企業が協賛をしてくれるようになったり、そういうことも増えてきました。

私のほうで準備したお話は以上です。ご清聴ありがとうございました。

■質疑応答より

Q.いくつか大学の例で早稲田のジェンダー研究センターやICUでリサーチをなさったというお話でしたが、もう少し日本の大学でやっている、LGBTのかたが学びやすく、教職員が仕事をしやすいために実際の取り組みの具体例はありますか。また、先生がこういうことをやれば大学として環境づくりに役立つという具体的な考えがありましたら教えてください。

A. Campus Prideの「やれることリスト」中では、いくつかのカテゴリについて取り組みが可能だということは言われておりますが、途中で申し上げたようにLGBに関することとTに関することがだいぶ違います。やれることの数としてはLGBのほうが数が多いと思います。数は多いのですが、LGBはプライベートな部分でのマイノリティなので、普通に授業も受けられるし、単位も取れるし、教職員であっても普通に仕事はできますので、結婚していないから何か不利益ということはそれほど無いと思いますから、基本的に具体的に困ることはそれほど無いです。しかし、雰囲気として自分のような存在が想定されていない雰囲気というか、どこことなく疎外感を感じるということはあるかと思えます。よって、目に見える形で具体的施策ということではないのですが、大学の規則とか憲章にLGBTに関する文言を入れていくとか、LGBT関連のイベントを開催するとか、LGBTウィークのようなものを開催するとかそういうようなことがあると、「ああ、大学として自分のことを無視しているわけではないんだな」ということを伝えられるかなと思います。LGBについてはそのような間接的な対応ということになってくるかなと思います。TについてはLGBより人数は少ないが、生活のあらゆるところで困ってきますので、Tの人に対しては具体的な対応が必要かと思えます。例えば、トイレにも行けないし、名前も名乗れないということです。東京大学の学生が頑張っているのは、学生証の名前を変えられるようにすることです。実際には戸籍の名前は結構すぐに変えられるのですが、親に十分に理解されていないとか、もっと時間をかけてアイデンティティを見極めていきたいけれども、とりあえず今の名前では困るとかそういうことがあ

るので、学生証の名前を戸籍と違うものにしたいということは結構あります。東京大学の場合は、変更事例として私が把握しているのは2例あるのですが、手続きがものすごく大変で、制度としては外国人の通称名使用にのっとって手続きを取り、それに加えて保護者の承諾証が必要、学生が成人していたとしても承諾証が必要であることと、最後、学部長が面談して確認するというような大げさな手続きになってます。それをもっと簡略化して欲しいということを今、学生が働きかけております。それと、男女の区別をするようなことがあると結構困ることがあります。東海大学の場合はどうか分からないのですが、東京大学は男性がとても多くて、女性が16～17%しかいない大学です。特に理系だと男性ばかりで、実験のグループ分けでなぜか女性の名前には赤で線が引いてあったりすると、男性扱いされると困るとか、女性扱いされると困るとかという人たちは引かかってくるので、不要な男性扱いはしない、不要な女性扱いはしないようにするというのもできることだと思います。途中で申し上げたように究極的に困るのは更衣室やトイレ、公衆浴場、合宿のお風呂などですので、その辺の対応をしてあげるということです。もう一つ困るのが健康診断です。健康診断は全員受けますから、健康診断でも個別対応が可能な体制を整えておくことがいいかと思えます。

Q. マイノリティのかたに対して協力的にアプローチしていくことが大切だということは分かったのですが、宗教的な観点で受け入れられないかたに関してどのようにアプローチすればよいか、考えをお聞かせください。

A. 日本は性役割がとても特殊で、同性愛を禁止する宗教がそれほどないので、その辺は不思議です。宗教的な観点でジェンダー感が特殊なわけではないです。日本としてどうするかということは興味深いテーマなのですが、宗教との関係としては同性愛を禁じる宗教というのは、イスラム教、キリスト教のカトリックとかいづれもその中でも保守派のかた達かなと思います。イスラム教、キリスト教でもLGBTが大丈夫というかた達もいますし、キリスト教関係者のLGBT団体もあります。先ほど5つの国で首相がLGBであるという例がありましたけれども、その中で3つくらいはカトリックの国ですし、同性婚を認めている国もカトリックの国がたくさんあります。宗教の解釈も時代とともに変わっていくことがありうると思います。例えば、保守的な国では、神が全て創ったということで進化論を教えなかったのが、進化論を教えられるようになるとか、それほど原理主義的でなければ話し合いの可能性があるというか、宗教を信じているから一切可能性が無いということではないだろ

などと思います。

Q.「やれることリスト」を紹介していただいたのですが、それをもとに大学側で取り組んだ例や学生側から取り組んだ例があれば教えてください。特に東海大学ではこれから取り組んでいくような状況なので、取っ掛かりになるような情報や、もしそういった事例が無ければ、ご自身がサークルを立ち上げた時の苦労された話があれば教えてください。

A.学生とか当事者とかアライのかたがたの自主的なサークルはすぐにはできると思いますし、東海大学にすでにあるのかも知れませんが、それを大学の公式な活動につなげていくのは結構ハードルが高いのかもしれないなと思っております。サークルのほうはカミングアウトの問題がありますので、そもそもサークルに集まれる人が限られてしまう、自分は絶対大学ではカミングアウトしたくないという人はそもそも集まりませんので、なるべく安全な場所を作るという工夫は必要かもしれません。東京大学ではLGBTサークルがありまして、そのサークルは当事者限定ということと、政治的な活動はしない、つまり大学に働きかけはしない、あくまで親睦会であるという位置づけでした。大学に働きかけをしようとすると、政治的な活動をしようとする際に、内部で方針の違いが出てきたりすると安全な場所ではなくなるというふうにうまくいかなかったりするので、あくまで親睦というか助け合うサークルが1つあり、そういった活動だけでは満足しない人、大学に働きかけていきたいとか、社会に何か発信していきたいとか、アライの人と一緒に活動をしたいという人は別のサークルを作って活動をしていくという形式に東京大学のサークルはなっております。大学の公式な活動としては東京大学はなかなか動かなかったもので、あまり言えることが無いのですが、とっかかりとしては、最近大学の国際化がすごく重要なテーマになっているかと思えます。日本はジェンダーについて保守的な国ですけれども、海外からきた先生がLGBTであるとか学生がLGBTであるというケースはたくさんあります。東京大学も最近、海外の協定校からアンケートがきて、それは協定校の学生を東京大学に送るにあたって、東京大学はどのくらいLGBTフレンドリーかというアンケートで、どのように回答するか困ってました。そのような国際化による圧力だとか、海外の大学とのやり取りなどで、その基準の違いが露呈するということがよくあると思います。しかし、欧米の大学から見ると日本の大学の遅れが目立つということになるかと思えます

が、アジアの国々から見ると東京はLGBTが暮らしやすい都市です。アジアでもイスラム教の国もありますし、母国では認めてもらえないので半ば逃げるようにアジアからの留学生も結構日本にいらっやいます。これは、留学生相談でよくあがってくるテーマであると思います。

■アンケートより

LGBTsを助けるという思考から共生するというシフトチェンジをすることが、今回の講演で印象に残りました。しかし一方で、小、中、高校生のように、Sexual identityが確立されていない発達段階の子どもには、支援が必要かなと思いました。LGBだけでなく心が移り変わるTもいるということで、学校教育がさらに難しさを増しているように感じました。(学生)

私はスペイン語を教えているのですが、スペイン語では男性名詞・女性名詞があって、例えば「私は日本人です。」という場合でも、Soy japonés. (男)、Soy japonesa. (女) の2通りの言いかたがあります。女子学生が「Soy japonés.」と言うと、これまでは「ちがうよ、Soy japonesa.だよ。Soy japonés.と言うと男性かと思われるよ」と直して、実際に問題もなかったのですが、最近本当にこれでよいのかと思うようになりました。また、これまで問題はなかったと思っていたが、もしかしたら一見女子学生に見えていたが、実は気持ちはSoy japonésだった学生もいたかもしれません。今後どのように説明していくべきかまだ模索中ですが、本日勉強させていただいたことを考慮に入れて、スペイン語ではどのような表現を使っているのか、どのような教育を行っているか調べてみたいと思います。(教員)

実は身近なことなのだと感じました。LGBTのかたが7.6%もいるということ。これは、学生も、教職員にも存在する可能性があるということ。差別するのではなく、理解してあげる社会を作り上げていく必要があります。将来社会を支える若者に良い、広く思想を持ってもらえる大学生活を送れるように取り組みたいと思いました。(職員)

FD・SD研修会を収録したDVDを
貸し出しています(学内のみ)

問い合わせ先:教育支援センター教育支援課
shien@tsc.u-tokai.ac.jp